

# 『卑弥呼は初代斎宮だった』

たかみやしんじ

令和元年（2019年）10月、首里城（那覇市）が火災により焼失してしまった。同年3月に見学したばかりだったので、一際衝撃が大きかったことを記憶している。焼失した正殿などの再建が決まり、令和8年（2026年）に完成の予定という。その旅行の時、「斎場御嶽」（南城市）の拝所も訪れた。「斎場御嶽」から久高島を望んだ。説明書も読んだので、「斎場御嶽」と久高島の関係、意味するところは理解したと思うのだが、その時はそれ以上の考察には至らなかった。

令和5年（2023年）6月、宮崎市を訪れた。研究目的の旅行ではなかったが、本欄の小稿「邪馬台国はやはり宮崎（日向）にあった」で言及した地下式横穴墓「生目古墳群」（宮崎市）を訪れてみた。また、やはり一度は訪れてみたかった「高千穂峡」に、宮崎市から車で日帰り旅行を取行した。あいにくの雨模様で「高千穂峡」はやや濁っていたが、まさしくパワースポットと言われるに相応しいと感じた。一帯は高千穂神社、天岩戸神社など古代史を飾る地区なので各所感慨深く見学した。

この「斎場御嶽」拝所と「高千穂峡」、なにやらシルエットが似ているような印象をもっていたのだが、今回の投稿論文の記述を進めてゆく中で、この二か所が神霊地としてはっきりと結び付いてきたのだった。急いで二つの旅行の写真集を捲ったところ、幸い二か所の写真を見つけることができた。論文中に、この地の二枚の写真が登場するので後ほどご覧いただきたい。

## 序章 中央構造線

中央構造線は日本列島を東西に走る断層線である。九州は熊本県から大分県を通り四国では愛媛県の瀬戸内海寄りを通り徳島県を抜けて、淡路島をかすめて和歌山県を通り三重県に入る。それから、愛知県は渥美半島から長野県東部を通り諏訪に入る。その後は北関東から茨城県千葉県に抜けている。

また、糸魚川—静岡構造線は中部日本地区を南北に走る断層線である。所謂「フォッサマグナ」（中央地溝帯）の西辺を走る断層線で、新潟県糸魚川市から諏訪湖を通って静岡県静岡市に抜けている。

興味を引くのは、この中央構造線に沿って著名な神社が鎮座していることである。西から弊立神社（熊本県山都町）、日前神宮・國懸神宮（和歌山県和歌山市）、伊勢神宮（三重県伊勢市）、豊川稲荷（愛知県豊川市）、諏訪大社（長野県茅野市・諏訪市・下諏訪町）、香取神宮（千葉県香取市）、鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）と名だたる神社が連なっている。何故にこのような神社（パワースポット）が連なっているのか大いなる謎とされているところである。

後藤拓磨氏（中央構造線の謎を探る会）の講演録（「中央構造線を考える」）がNETに掲載されている。そのほんの一部であるが次のように述べられている。“これは宇宙のランドサットから撮った写真です。中央構造線がこう走っています。ここが伊良湖岬の先端、ここが伊勢ですね。こうした空中からの写真を見ていただくとですね、構造線は、これは明らかな「道」なんですよね。おそらく古代の人たちは、この断層沿いに移動したんじゃないかといわれていますけれども、それはこれがルートとして使えるからです。……なぜ断層が道になるかということですが、これは私どもの地元にある博物館の絵を使わせていただきましたが、断層の鞍部というものがあまして、こういうところが人が行動する、移動するには楽な訳です”。

上記のように、中央構造線上に著名な神社が連なることから、パワースポット説、活断層上にあることから地震を鎮める説があると言われているが、縄文古道説というのも傾聴に値するのではないかと思う。一例として諏訪地方が挙げられるであろう。

縄文時代（前期～中期）に諏訪地方は日本のなかでも有数な人口を誇った。それは、温暖な気候の中で多くの動物や豊かな植物に恵まれていたことがあるだろう。しかしながら、そのような地域はたくさんあった訳で、諏訪が特筆されるのはやはり良質な「黒曜石」と「片岩」の産地であり、それらの流通の道が諏訪を中心にして東西南北に開けていたということだろう。それらを求めて人々が諏訪を目指した。また、所謂縄文の海進で居場所を追われた人々が諏訪を目指した。その頃諏訪地方がたいへんな賑わいをみせていたことは想像に難くないのである。

道というのは何なのだろうか。道があるから人はそこを歩くのだろうか。そうではないだろう。矢張り、目的があって移動するそして繰り返し移動するから道が形成されるのであろう。しかも、当然のことながら茨の道でない道のほうが好まれた。

縄文時代の人々にとって「黒曜石」や「片岩」は生活必需品だった。だから、特に中部地方の人々はこれらを求めて諏訪に歩いたのであろう。しかしながら、時代はやがて弥生時代へと移行してゆく。それは、外国からの稲作文化や金属器などの渡来により、日本各地の集団に対して大きな変化をもたらした過程でもあった。そして、その変化の結果の姿を纏まった形で記述しているのが、所謂「魏志倭人伝」ということになるのであろう。

「魏志倭人伝」に記述される邪馬台国は九州にあったのか。それとも畿内にあったのか。いずれにしても、外国からの稲作文化などの渡来により、西日本地区では飛躍的に人口が増加したと考えられており、九州地区から弥生時代の大きな変化が動き出した模様である。

中央構造線は諏訪に代表されるように、中部地区が目立っているようである。しかしながら、冒頭で既述のように中央構造線は熊本県から大分県、四国、和歌山県、三重県と西部地区をも走っている。この西部地区の道では何も運ばれる物がなかったのであろうか。

実は、この中央構造線西部地区を結ぶ各地では弥生時代の貴重な鉱物「辰砂」が産出されていたのである。九州南部水銀鉱床群、阿波水銀鉱床群、大和水銀鉱床群である。では、これらの水銀鉱床群から産出される「辰砂」は弥生時代においてどのように使われていたのであろうか。

Wikipediaによれば、「辰砂」とは硫化水銀からなる鉱物で、日本では古来「丹」と呼ばれた。水銀の重要な鉱石とされる。中国の辰州（現湖南省）で多く産出されたことから「辰砂」と呼ばれるようになった。「魏志倭人伝」にも“其山丹有”という記述がある。そして、多くの遺跡では古墳の内壁や石棺の彩色や壁画に使用されていたことが証言されている。

この“古墳の内壁や石棺の彩色や壁画に使用されていた”ということだが、これらのことが弥生時代の「辰砂」を論じる上で極めて重要な意味をもっているのである。

弥生時代の社会変革をもたらした稲作は縄文時代の食文化を画期的に変革した。また、金属器（鉄器）は生産財・武器として大きな変化をもたらした。そうして、弥生時代の社会は小さな集団から村へそして国へと発展していくのであった。そして、国の首長たちは祭祀や葬送をより権威のあるものへと変えていく。その威信の象徴が古墳へと発展していくのである。

大和天神山古墳は奈良県天理市に発掘された。台地上に立地する墳丘長113メートルの前方後円墳である。後円部の中央に竪穴式石室が検出され、石室の内部には木櫃が置かれており、総量41kgの水銀朱（丹）が納められていた。実は、弥生時代の丹を考古学的にみると、北九州の弥生中期から後期の甕棺墓から多量の丹が検出されている。福岡県下前原町の平原の弥生の方形周溝墓からも多量の丹が出土。また、岡山県下楯築の弥生の墳丘墓（弥生時代後期）からは30kgを超える丹が検出されているのである。

一説によれば、弥生時代から古墳時代の各国の首長にとって威信を示すに相応しい規模の墓を築くこと、それに使用する丹の確保・蓄積がまた威信を示すことと同義であったかのようにも言われるのである。

さてここに来て、ようやく中央構造線西部地区の九州南部水銀鉱床群、阿波水銀鉱床群、大和水銀鉱床群がクローズアップされるであろう。各国首長にとって必需品となった「丹」はこれらの水銀鉱床群から供給されていた。即ち、そこには「丹」を運ぶ道があったのである。この中央構造線西部地区は既に各位お気づきのよう和歌山県と徳島県は紀伊水道で、愛媛県と大分県は豊後水道で海により隔てられている。従って、この

間は海運で繋げられていたのではないかと考えられるのである。この「辰砂」の道は、縄文古道と対比させるなら弥生古道とでも言えるのであろうか。

ところで、各国の首長たちは何故揃いも揃って「丹」を求めるようになったのであろうか。それは、稲作や金属文化を帯同して渡来してきた人々の影響以外には考えられないのであるがいかがであろうか。そしてまた、その影響が一地域に留まらず、九州から発して広域の国々に広がって行ったからこそであろうと考えられるがいかがであろうか。

「魏志倭人伝」が縄文時代から弥生時代への変化の集大成の姿であるなら、それら謎の答えは「魏志倭人伝」に記述される邪馬台国にありそうである。そして、邪馬台国の女王・卑弥呼の解明こそがその答えを示してくれるものでありそうである。

## 第一章 卑弥呼の原像と邪馬台国

女性の霊力を著した「妹の力」（柳田國男）という一書がある。特に、本稿の論述に關係する沖縄に関する部分について以下に抜粋してみる。

『此の如き兄妹の宗教上の提携の、如何に自然のものであったかは、遠近多種の民族の類例を比べて見てもわかる。近くはアイヌの昔物語に於いても、最近金田一氏の訳出せられた伝説に依れば、処々の島山に占拠した神は、必ず兄と妹との一組にきまって居た。沖縄は固より我民族の遠い分れで、古い様式を保存し得る事情はあったが、是亦御岳の神々は男女の二柱であって、其名の対偶より判じて見ても、我が神代卷の最初の双神と共に、本来同胞の御神であったことが想像せられる。齋院（注1）が神を祭る慣習も彼島には近世までであった。元は一々の旧家名門に、各々小規模の玉依姫（注2）が定められて居たことは、現在まだ疑う余地の無い痕跡が存して居る。内地に於ては祝神主の男子が、政治の必要から次第に巫女の家を抑制したに反して、彼に在っては今も祭祀が婦人に独占せられて居る。其上に重要な祈願に於ては、もとは屢々「をなり神」（注3）を拝する習があった。即ち妹の神女を仲に立てて神の靈に面することであって、ヲナリは島々に於ては現に又我々の謂う姉妹を意味して居る。同じ語とおぼしきものが内地で用いられるのは、ただ田植の折の田の神の祭のみであるが、其任務の極めて神聖に、且つ家々の生活にとって最も重要であったことは、歌曲と口碑の中からも之を窺うことが出来る』

※1 「齋院」…賀茂神社に奉仕した皇女である。伊勢神宮の齋宮と併せて齋王という。齋王の御所を指すこともある。(Wikipedia)

※2 「玉依姫」…神武天皇の母親である。名義は「心霊が依り憑く巫女」と考えられ

る。(同)

※3 「をなり神」…妹（ヲナリ）が兄（エケリ）を靈的に守護すると考え、妹の靈力を信仰する沖縄地方の信仰である。(同)

次に、本欄の小稿「邪馬台国はやはり日向（宮崎）にあった」にて論述した卑弥呼の原像に関係する部分について以下に抜粋してみる。

『魏志倭人伝の記述。“その国、本亦男子をもって王となす。往まること70、80年。倭国乱れ、相攻伐すること歴年、すなわち共に一女子をたてて王となす。名を卑弥呼という。鬼道に事え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも、夫壻なし。男弟ありて、佐けて国を治む。王となりてより以来、見る者少なし。婢千人を以て自ら侍らしめ、ただ男子一人ありて、飲食を給し、辞を伝え居るところに出入りす。宮室は楼観・城柵、巖かに設け、常に人あり、兵を持して守衛す”。(大塚初重：「邪馬台国をとらえなおす」)

平たく言えば、倭人の国々は男子を王としていたのだが、乱れた。相互に何年か戦争状態になってしまった。そこで、これを整えるため卑弥呼を共立して王とした。卑弥呼は鬼道に優れており国民の信頼を得たというようなことが記述されている。また、卑弥呼は独身で年をとっている。弟がおり、協力して国を統治している。

注目すべきは卑弥呼が強力な軍事力をもって国々を統治したのではないことである。それは鬼道であったことである。そして、共立したのであるから、これに参画した国々は卑弥呼と同様の宗教観をもっていたからこそ支持されたということである。この頃、九州の多くの地域をカバーするような宗教観とはどのようなことであったのだろうか。

本稿では、卑弥呼の原像を沖縄に残る「斎場御嶽（せいふあうたき）」を管掌する「聞得大君（きこえおおきみ）」に求めてみたい。「聞得大君」は、琉球の信仰において最高位の呼称であり、琉球国王に並び、琉球王国全土を靈的に守護するものとされていたのである。この「聞得大君」、国王の「をなり神」（妹が兄を守護する）と言われる。これが卑弥呼と重なってこないだろうか。

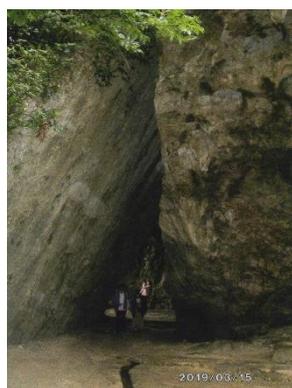
また、魏志の伝える“鬼道に事え、能く衆を惑わす”ということが邪馬台国一国のことなら容易に理解できるが、九州地区広域で認知され、女王に共立されたということの意味は、それこそ、九州地区の多くの国々が同様の宗教観を有していたということになるのだろう。だから、人々にも受け入れられたのである。

実はこの「聞得大君」的な宗教観は、もっと時代を遡って沖縄に根付いていたのである。琉球王朝時代以前の沖縄の村落時代（3世紀～12世紀）、御嶽が信仰対象であり、この祭祀を根神（姉妹）が司り、その信託によって根人（兄弟）が政治を行ったという研究も発表されている。このような宗教観が九州地区にも根付いていたとすれば、卑弥呼が女王に共立されたことが自然に理解されるのではないだろうか。そして、それは沖縄から流れてきた可能性を秘めているのである。』

さて上記の論述であるが、実は解明しなければならない二つの問題がある。一つは「をなり神」の信仰が本当に沖縄から九州に流れてきたのかという問題である。このことについては柳田國男氏が「妹の力」で論述しているように女性の神靈力は日本各地においてみられることのようなのである。しかしながら、一万年という縄文時代に形成されたものであるならば、それはやはりどこかに震源地ともいべき事象がなくてはならない。因みに、インドネシアのライジュア島などでは姉妹がその兄弟を靈的に守護するという信仰があり、兄弟が危険な場所に旅立つ時にはその姉妹は自ら織ったイカットという布を兄弟に贈るという。(Wikipedia) インドネシアの島々から沖縄の島々へは島から島へ連なっていたと言われており、そのような風習・宗教的な習が伝わってきていたとしてもありえないことではないかもしれない。そして、最初の着地点は地勢的に考えても沖縄地区以外には考えられないだろう。

驚くことに、「古事記」にそれに類することが記述されているのである。オオナムチがスサノオの試練を受ける段。蛇の室屋で寝るようスサノオに命じられたオオナムチにスセリヒメがそっと近寄り、<sup>ひれ</sup>領巾〜薄く細長い布で、難を逃れられる呪力があると信じられていた〜を渡し、そっと囁いた。“これは蛇の領巾とって呪力があるの。蛇があなたを咬もうとしたら三度振ってくださいな” …この夜オオナムチはぐっすり眠ることができたのだった。

二つ目の問題は、女王に共立された卑弥呼が九州地区の各国と同じような宗教観を持っていたとした点である。確かに同じような宗教観をもっていなければ各国が卑弥呼に同調する訳がないのであるが、共立するという事はそうした国々を統括できるような何かが必要ではないだろうか。それは何なのだろうか。その手掛かりは卑弥呼が政治や軍隊を担当していたのではなく祭祀を担当していた点にあるのではないだろうか。



その答えは次章以降に譲るが、ここでは「斎場御嶽」(沖縄県南城市)と「高千穂峡」(宮崎県高千穂町)の類似について言及してみたい。写真左は「斎場御嶽」の三庫理(さんぐい)と言われる最も格の高い拝所である。写真右は「高千穂峡」である。この地は天孫降臨の候補地(高千穂町穂触嶽、霧島峰)の一つである。古来、石や樹木などに降りてくるとされていた神靈だから、このような神秘的な所を崇めただろうことは大いに考えられることであろう。卑弥呼の原像を沖縄に残る「斎場御嶽」を管掌する「聞得大君」に求めるとすれば、卑弥呼が「高千穂峡」で特別な祭祀を司っていたことは大いに考えられることではないだろうか。

この2つの写真の類似は極めて衝撃的ではあるのだが、実はそれ以上に衝撃的なことがある。それは、「魏志倭人伝」の邪馬台国までの旅程が「古事記」のイワレヒコの東征の旅程（高千穂から出発）と殆ど重なっているということなのである。記紀の編者たちは「魏志倭人伝」を熟読していたのではないかと多くの歴史家が指摘している。また、記紀編纂は邪馬台国の時代（200年前後）の概ね500年後くらいのものであり、口伝も残されていたことが想像される。それらのことから、記紀の編者たちは邪馬台国の場所を比定できていたのではないかと考えられるのである。

「古事記」の記述。“ウガヤフキアエズの長男イツセと四男イワレヒコは日向国（宮崎県）の高千穂の宮で国を治めていた。ある日のこと、日向国は端っこにありすぎる、どこの国に住めば天下を安らかに治めることができるだろうかと相談した結果、もっと東の方に行ってみようということになった。そこでイワレヒコの一行は、高千穂の宮を発った。そして海路北上する（「日本書紀」によれば、日向国美々津から船出する）。豊国の宇佐（大分県）に到着すると、ウサツヒコ・ウサツヒメ兄弟は宮殿まで造って歓待した。次に一行は西に向かい筑紫の岡田の宮（遠賀川下流）に1年住んだ。”

「魏志倭人伝」の記述。北九州地域（伊都国・奴国・不弥国）から南へ船で20日行くと投馬国に至る。さらに南へ船で10日行き、陸を1ヶ月行くと邪馬台国に至る。女王の都するところである。この記述だけでは邪馬台国の場所を比定することはできない。江戸時代以降の歴史家が研究に研究を重ねてきているのだが無理なことは無理なのである。では、記紀の編者たちは何故邪馬台国の位置を比定できたのだろうか。それは、「魏志倭人伝」の記述以外の情報（他の文献や口伝などによる）が伝わっており、その情報を入手できたからであろう。その情報とは何だったのか。まずは、邪馬台国が日向国にあったとしたことについてである。このことを考えるにあたって、一番に問題になるのは邪馬台国という国がどのような国であったのかということが殆ど解らないことである。歴史家は各々の見識によって各々のイメージを描いているのであろうが、それを披歴した姿を余り見かけない。それもそのはずである。披歴できるような情報が「魏志倭人伝」の記述以外にはないからである。しかしながら、記紀の編者たちの時代にはそれがあったのである。

邪馬台国には7万戸あったというのであるが、誰がどうやって数えたというのであろうか。邪馬台国では卑弥呼が都を形成していたというのであるが、そのような一角がどこにあったのだろうか。そもそも都が何故必要だったのか。婢千人を侍らしていたというのだが、鬼道を行うのに婢千人が何故必要なのか。…これらの答えを記紀編者たちは解っていた。それは邪馬台国が立派な国であることを魏の官吏に吹聴したかったからということになる。伊都国に設置された一大卒の官僚はそのように魏の官吏に伝えた。邪馬台国の位置についても遠国でありとても行けない国であると説明した。そうしたこと

が結果として「魏志倭人伝」に記述されたということになる。では、何故そのような虚偽を申告したのかということが次に問題となる。その答えは、魏の（帯方郡）官吏がそのようにサジェスションしたからということになる。帯方郡の官吏が何故そのようなサジェスションをしたかと言えば、それは当時覇権を争っていた呉に対して、東の大国である倭国を抑えたというアドバンテージを示す必要があったということだろう。そのこと、そして邪馬台国の場所は記紀の編者たちは口伝などにより知ることができたのだった。そう、邪馬台国は日向国にあった。そして、卑弥呼が特別な祭祀を司る宮が高千穂にあったのである。

では、投馬国の位置についてはいかがであろうか。これについても記紀の編者たちは何か情報を得ていたものと考えられる。次章以降で詳論する予定のため暫くお待ちいただきたい。

## 第二章 卑弥呼と天照大神

さて、本稿では卑弥呼が初代齋宮であったことを論証しようとしている。ということは、「古事記」や「日本書紀」の記述と卑弥呼の関係が先ずは解明されなければならないのである。ご存じのように、「古事記」・「日本書紀」では天照大神、スサノオ、月読命を三貴神と位置付けている。そして、多くの古代史論者が卑弥呼＝天照大神としているようである。そこで先ずはそれらの関係から入っていくこととしよう。

### （1）天照大神の遷宮の意味

崇神天皇と垂仁天皇の2代にわたり、天照大神を皇居から伊勢神宮に遷宮した。また、倭大国魂神も崇神天皇により皇居から遷された。その経緯は以下のとおりである。記紀の記述では、崇神天皇5年、疫病が流行して人口の半数が失われたので祭祀で疫病を収めようと天照大神と倭大国魂神を皇居から遷すこととした。天照大神は豊鋤入姫命に託され笠縫邑に祀った。しかし、淳名城入媛命に託された倭大国魂神は媛が痩せ細ってしまい祀ることができなかった。

崇神7年、倭迹迹日百襲媛命に憑依した大物主神が我れを祀れと託宣した。それで、大田田根子に命じて大物主神を大神神社に祀らせた。倭大国魂神は大和神社に祀らせた。すると世の中は平穏になったというのである。

垂仁天皇25年、天照大神の祭祀を倭姫命に託した。宇陀、近江、美濃と周った倭姫命は最終的に伊勢に落ち着き伊勢神宮を建立した。

さて、これらの話はそれでよいのだが、問題は天照大神が誰であるかということ、そして、天照大神と倭大国魂神を皇居から外に遷して、その後に祀った神は誰なのかということである。それらのことが解明されないことには歴史としての理解ということに至らないのである。

本来的には皇居に祀られたのは、大和に降臨してナガスネヒコの妹を娶り、大和王朝を築いたニギハヤヒであったということなのだが、それでは日向に降臨したニニギの後裔のイワレヒコが大和王朝の禪譲を受け初代天皇についたことに説明がつかなくなる。そこで祖神の倭大国魂神と天照大神を皇居に祀ったことにしたということだろう。倭大国魂神は本来ニギハヤヒの祖神であるスサノオなのだが、記紀においてはここを曖昧にして、大物主を登場させた。何故かと言えば、記紀の記述ではニギハヤヒを大和に降臨させたのは天照大神であり、倭大国魂神も天照大神になってしまうからである。

では、崇神・垂仁二代にわたって倭大国魂神と天照大神を皇居から遷したのは何故だったのだろうか。それは新たに祀るべき大神が現れたからに他ならないだろう。そして、それは卑弥呼ということになるのだが、では何故卑弥呼なのかということが次に説明されなくてはならない。

## (2) 卑弥呼と辰砂

さて、今までの記述で保留にしてきたことが二点ある。一つは卑弥呼が九州地区広域で共立された理由である。そして、もう一つが投馬国の位置についてである。

先ずは、卑弥呼が九州地区で共立された理由である。先に記述のように、女王に共立された卑弥呼の邪馬台国は九州地区の各国と同じような宗教観を持っていた。確かに同じような宗教観をもっていなければ各国が卑弥呼に同調する訳がないのである。そして、女王に共立されたということはそうした国々を統括できるような何かがないはずではなかった。それは何なのだろうか。それはやはり、卑弥呼が政治や軍隊を担当していたのではなく祭祀を担当していた点にあったものと考えるのが相当ではないかと思うのである。

魏志倭人伝の記述。其の死には棺あれど槨なく土を封じて冢を作る。始め死するや喪に停まること十余日、時に当りて肉を食わず、喪主哭泣し、他人は就いて歌舞飲食す。すでに葬れば、家を挙げて水中に詣りて澡浴し、以て練沐の如し。(大塚初重：「邪馬台国をとらえなおす」)

上記の“始め死するや喪に停まること十余日”という件に注目していただきたい。ご遺体を棺に入れて、十余日間歌舞飲食していたのである。そうしている間にご遺体はどうなっていたであろうか。そこで卑弥呼がみせた呪術の一つが辰砂を用いてご遺体の腐敗を防止することだったのではないだろうか。即ち、ご遺体を安置した棺の底に辰砂を敷き詰めた。特に頭部や上半身には手厚く辰砂を施したのであろう。こうした施朱が人々に感動と畏敬の念を齎した。ご遺体の腐敗が進まなかったからである。或いはもう一つ、疫病等不治の病の人々に仙薬を調製した可能性も考えられるのであるがいかがであろうか。

中国では漢の時代ころから煉丹術が盛んになり西晋の時代には確立されていたようである。道士の術の一つで服用すると不老不死の仙人になれる靈薬をつくるというのであ

る。このことに関しては秦の始皇帝が著名で、不老不死の仙薬を服用して死期を早めたとも言われる。また、仙薬を求めさせて徐福を東の海に向かって旅立たせたとも言われるのである。秦の始皇帝は巨大な陵墓でも有名であるが、棺の周囲は水銀の川や海で囲まれていたというのである。これらの川や海に必要な水銀はどこから賄おうとしていたのだろうか。西に東に探索の手を伸ばしていたであろうことは想像に難くない。徐福は、東の探索隊の隊長だったのであろう。かかる任務を帯びて徐福は日本各地に土着した。そして、各地に仙薬（水銀）を求めて足跡を残したのだった。

「続日本紀」の文武天皇2年（698年）、常陸国・備前国・伊予国・豊後国・日向国・伊勢国などから朱砂（辰砂）が献上されているという記述があるという。これらの国々が辰砂の産出地であるとは言い切れないものの、産出地か加工地であり、辰砂の供給ができた地であったことは確認されよう。

これらの国々の中で日向国に辰砂の鉱床があったのか、研究データ不詳である。若し鉱床がなかったとすれば加工地ということになる。産出地でない国が献上していたのであるから、それは相当に古い時代から加工地として機能してきたことが推量されるのである。

先述の徐福が辰砂を求めて土着したと言われる国の一つに日向国がある。そして、隣国の豊後国は辰砂の産出地である。となれば、豊後国の辰砂の産出を開拓したのは徐福一行ではなかったかとも考えられるのである。

「魏志倭人伝」の時代の投馬国が5万戸の国と記述されている。その規模は誇張と考えるべきであろうが、誇張するに値する国が存在したとすれば、それは何らかの謂れがなくてはならないだろう。それが、辰砂の産出であったとすればそれは納得のいくものではないだろうか。また、邪馬台国が7万戸の国であったとされることも誇張であろうと思われる。しかしながら、こちらも辰砂の加工地としてその存在感を示すものと考えれば納得がいくのではないだろうか。そして、それらのことを差配していたのが邪馬台国の女王、卑弥呼ということになるのである。

### （3）卑弥呼の東征

さて、先述のようにスサノオを祖神とするニギハヤヒが初期の倭王朝を築いた。この初期倭王朝を奪取すべく動いたのが卑弥呼だった。何故に卑弥呼は倭王朝を欲しがったのであろうか。それは、辰砂を欲しがったということに他ならないのである。既述のように徐福一行は水銀を求めて東の海に旅立ったのだった。そして、水銀鉱床を求めて日本各地に着地して探索の手を伸ばしたのであろう。それらの一つに大和水銀鉱床群があった。いわゆる徐福伝説によれば、徐福一行の一部部隊が三重県熊野市、和歌山県新宮市に土着したとされている。この部隊が狙っていたのは大和水銀鉱床群であった。

記紀の記述によれば、イワレヒコは太陽を背にして戦おうということなり、熊野にたどり着く。宇陀でエウカシ・オトウカシに勝ったイワレヒコは喜びの歌を謡う。忍坂では多くの土蜘蛛が待ち構えていたが、これらを突破してゆく。なにげないこれらの記紀の記述であるが、実はこれらの地はどうも辰砂の産地であったらしいのである。そうこうして、記紀の記述ではイワレヒコは遂に倭王朝を手に入れるのであった。

従来から古代史の研究において、九州の王朝が何故大和（奈良）を目指したのかということが大いなる謎であった。全国を席捲するには九州は端過ぎる、だから大和を目指したという論もある。一般論として特段の異論を挟む余地のない論ではある。また、昨今では遺跡に残された土器などの分析から尾張地区や備前地区などの有力者による合同王朝なる論も展開されており、多くの賛同を得ているようである。考古学的にも合理的な論であり異論を挟む余地は殆どないやに思われるものではある。

しかしながら、何か物足りないのである。この物足りなさを補うのが、九州王朝が大和水銀鉱床群の確保を目指して進出したということなのである。

では、これより史実の復元に取り掛かってみたい。最初に取り掛かるべきは記紀に記述されるころの、スサノオと天照大神の誓約の段であろうと考える。ここにおいて、出雲系と日向系の九州地区の国々の領有が定められた模様である。即ち、出雲系は宗像界隈を中心にした北九州東地域を拠点とした。日向系は日向国・投馬国など九州南部を拠点とした。そして、各々東に向かって進出するのだった。

まずは、出雲系としてはオオヤマツミ系と連携し、北九州東部を席捲したスサノオの指示によりニギハヤヒが北九州から畿内を目指し、ナガスネヒコの大和を獲りここに初期大和王朝を築く。そして、何代かが続く。

日向系としては天照大神の命によりニニギが日向に降臨、何代か後に卑弥呼が頭角を現す。そして、まずは隣国投馬国を併合する。これを記紀ではイワレヒコの東征譚においてウサツヒコ・ウサツヒメの歓待と記述する。記紀の記述では、この後の北九州から畿内への東征譚を、上記ニギハヤヒの畿内進出を拝借して記述する。そして、問題の熊野から大和への進出譚である。実は、徐福一行は辰砂を求めて日本全国に進出していた。それらの一つに熊野があった。この熊野の一派がニギハヤヒを祖とする大和王朝を獲りにいった。何故か。そう、大和の辰砂を確保するためなのであった。ここに打ち立てた新王朝を記紀は第十代崇神天皇とし、御肇国天皇（はつくにしらすすめらみこと）と称されたのである。

この後、垂仁天皇と二代がかりで伊勢神宮（三重県伊勢市）と日前神宮・國懸神宮（和歌山県和歌山市）を鎮座せしめる。伊勢神宮は中央構造線のいわば東の入り口、日前神宮・國懸神宮は西の入り口である。何故このような位置に神宮を創祀したのか。そう、大和の辰砂産出地を守るための砦だったのである。

### 第三章 卑弥呼と台与

本章の記述を進めるにあたって、卑弥呼＝天照大神論について触れておく必要がある。天照大神は記紀では女神であり、「高天原」を統べる主宰神で、皇祖神とされている。

る。この「高天原」というのが難しい概念であるが、ここでは“稲作など先進文化を帯同して日本に渡来した、やまと国家形成に影響した外国人の一団”と定義して先に進んで参りたい。本稿では卑弥呼を徐福一行が土着して形成した日向国の末裔と考えているので、これは「高天原」に該当する。また、女神であり、もちろん皇祖神である。となると、卑弥呼＝天照大神が成り立つかのようなのであるが、問題は活躍時代である。卑弥呼の活躍時代は「魏志倭人伝」の記述などから概ね190年前後から250年前後ということになるのであろう。

ところが、スサノオや天照大神の活躍時代はそれよりも数世代遡らないと整合性がとれないのである。既に度々記述しているように、ニギハヤヒの降臨やニギの降臨が卑弥呼の活躍時代に先んじているからである。それらの時代は、「後漢書」に“安帝永初元年（107年）に倭国王師升等が生口160人を献上した”と記述される時代あたりが相当ではないかと考えられるのであるがいかがであろうか。

卑弥呼が献上したのは、男生口4人、女生口6人、班布2匹2丈であった。これらに比べても師升等の朝貢はより大掛かりなものであったことが推量され、相当な大きな一時代が形成されていたことと思われるのである。では、この朝貢を差配したのは誰だったのであろうか。これには、またまた諸説あり大きな議論を呼ぶところであろうが、本稿では師升等はニギハヤヒの降臨を命じたスサノオではないだろうかとしておきたいと考えている。

以上より、卑弥呼≠天照大神が論述されたのであるが、なお記紀の記述では卑弥呼＝天照大神と考えたくなるように記述されている。それは、記紀が一切卑弥呼を登場させないように記述しており、天照大神を卑弥呼に擬して記述しているからだろう。何故かといえば、卑弥呼を登場させると皇統譜が純日本系となくなってしまうからである。そこで、天照大神を登場させて曖昧にしたということだろう。

## （1）齋宮とは

本稿では、卑弥呼が初代の齋宮であることを論証しようとしている。そこで、まずは齋宮とは何かということを確認しておきたい。

Wikipediaによれば概略次のように説明されている。“齋宮（さいぐう、いつきのみや）は、日本の古代から南北朝にかけて、伊勢神宮に奉仕した齋王の御所で、平安時代以降は賀茂神社の齋王（齋院）と区別するため、齋王のことも指した。「日本書紀」によれば崇神天皇が皇女豊鋤入姫命に命じて宮中に祭られていた天照大神を大和国の笠縫邑に祭らせたとあり、これが齋王（齋宮）の始まりとされる。垂仁天皇の時代、皇女倭姫命が各地を巡行し伊勢国に辿り着きそこに天照大神を祭った。この時のことを「日本書紀」垂仁天皇紀は、齋宮を五十鈴川の川上に興つ。これを磯宮（いそのみや）と謂う

と記し、これが斎王の籠る宮、後の斎宮御所の原型であったと推測される。また、天皇は倭姫命をもって御杖（みつえ）として天照大神に貢奉りたまふと述べ、以後、斎王は天皇の代替わりごとに置かれて、天照大神の「御杖代（みつえしろ、神の意を受ける依り代）」として伊勢神宮に奉仕したという”。

この説明は一般論としては適当であり、何らの問題はないのであるが、この制度が成立した背景について言及しようとする、いくつかの点について明らかにしなければならない。それは次のような疑問に答えることである。斎王は何故女性なのか。斎王は何故皇女なのか。斎王は何故天皇の代替わりごとに置かれるのか。斎王は何故天皇の御杖代となる必要があるのか。斎王は何故伊勢神宮に奉仕するのか。実は、これらの何故に一気に答える方法がある。それは、卑弥呼を分析することである。では、いよいよ卑弥呼に迫っていくこととしよう。

## （2）卑弥呼斎宮論

本稿では既に詳論しているように、卑弥呼の原像を琉球の信仰に求めた。そこで卑弥呼斎宮論を明確化するためにもう一度確認しておこう。

「魏志倭人伝」によれば、卑弥呼には弟がいて、協力して国を統治していた。卑弥呼は鬼道に優れており国民の信頼を得ていた。従って、政治や軍事は弟が差配していたものと解されるのである。

卑弥呼の原像は、琉球の「斎場御嶽」を管掌する「聞得大君」に求められる。「聞得大君」は琉球の信仰において最高位の呼称であり、琉球国王に並び、琉球王国全土を霊的に守護するものとされていた。この「聞得大君」、国王の「をなり神」（妹が兄を守護する）と言われている。こうした琉球の信仰については、琉球王朝以前の村落時代（3世紀～12世紀）においても御嶽が信仰対象であり、この祭祀を根神（姉妹）が司り、その信託によって根人（兄弟）が政治を行ったとされているのである。

以上の数行で上記（1）項の殆どの質問に答えているであろう。唯一、斎宮は何故伊勢神宮に奉仕するのかという質問には答えられていない。そこで、次にこの質問に答えていきたい。

「魏志倭人伝」の記述では、“…（卑弥呼の）宮室は楼観・城柵厳かに設け、常に人あり、兵を持して守衛す”（「邪馬台国をとらえなおす」：大塚初重）である。このように、卑弥呼も宮において鬼道に事えていた訳であり、斎宮が伊勢神宮に奉仕していたことと通じているのである。

しかしながら、齋宮が何故伊勢神宮に奉仕していたのかという質問には未だ答え切れていないのである。そこで、崇神天皇と垂仁天皇が倭大国魂神と天照大神を皇居から遷した経緯をもう一度検討してみようと思う。そもそも、ニギハヤヒが興した初期大和王朝であるから、倭大国魂神が祀られていたことは納得がいくのであるが、天照大神が祀られていたということが理解できないのである。記紀ではイワレヒコが神武天皇になったのであるからそのような記述になるのであろうが、それは史実ではなかった。だとすれば、崇神天皇が大和に入った時には天照大神が祀られてはいなかったのである。

では、天照大神（八咫鏡）が皇女・倭姫命に託され、伊勢神宮に辿り着くまで近江国、美濃国と廻っている記紀の記述をどのように説明するのか。ここで、伊勢神宮＝砦説を思い出していただきたいのである。そう、倭姫命の行脚の答えは砦に配置する軍隊の募集であったのである。そして、砦には神宮を造り卑弥呼を祀った。そうして、天皇家の齋宮として寄与したのである。そうは言っても、このようなことを記紀に記述する訳にはいかない。そこで、記紀は天照大神を皇室に祀ったこととし、そして、伊勢神宮に遷すというストーリーを作り上げた。カモフラージュのためである。

この伊勢神宮＝砦説の背景には、既述のように辰砂の採掘権の保持があるのだが、このように唐突に砦説を持ち出されても戸惑う向きが多いことと推察される。そこで、砦説を補強する記紀の記述を紹介しようと思う。それは、持統天皇のたびたびの吉野行きの理由である。一般的には、大海人皇子が出家して一時一緒に暮らした吉野を偲んでのことと説明されるのだが、その回数多さに疑問が投げかけられる。しかしながら、このことについても辰砂の産出への熱い思いであるとすれば大いに考えられることなのではないだろうか。因みに、吉野は金・銀・銅など鉱物資源に恵まれており、辰砂も採掘されていたのであろう。丹生川、丹生村などの名が残る。

また、倭姫命はヤマトタケルが東国征討の折り、草薙剣を授けるのだが、これも剣一太刀を授けたということでは現実的ではなく、軍隊の一部隊を授けたと解するべきではないだろうか。

このように、伊勢に砦を築き、神宮に卑弥呼を祀り、辰砂の産出の安定を図った。その大役を果たしたのが皇女たちであった。表向きには、神宮の卑弥呼を祀ることが前面に掲げられていたのであろうと想像される。そして後に、齋宮として制度化されるのであるから、何代も何代も続けられたのであろう。この齋宮、既に明らかな様に初代は卑弥呼である。そして、その卑弥呼を祀って次代の齋宮が伊勢の砦に奉仕したのである。その姿は、まさしく“宮室は楼観・城柵巖かに設け、常に人あり、兵を持して守衛す”であったはずなのである。

この伊勢神宮、持統天皇以降の天皇の参拝が殆ど行われなかったという。その理由を問われるならば、天照大神を祀っていたと記紀に既述されるものの、実は天照大神が祀

られていなかったことは皇族はじめ知識人の多くの知るところであったのではないだろうか。

### (3) 台与齋宮論

「魏志倭人伝」の記述。“卑弥呼以て死す。大いに冢を作る。径百余歩、佝葬する者、奴婢百余人。更に男王立てしも、國中服せず。更に相誅殺す。時に当りて千余人を殺す。また卑弥呼の宗女台与年十三歳なるを立てて王となし、國中遂に定まる。政等、檄を以て台与に告諭す”。(大塚初重：「邪馬台国をとらえなおす」)

卑弥呼が亡くなったので、大きな古墳を造って葬った。そして、再び男王を立てたが国は争乱状態となってしまった。そこで、十三歳の台与を女王とした。すると、国は争乱が収まったというのである。卑弥呼は九州(日向)で亡くなったので、九州においてはまだ(卑弥呼の)鬼道を必要な状況であったのであろう。即ち、大陸などから渡来した疫病が収束していなかったのである。だから、卑弥呼の宗女台与を立てる必要があった。では、宗女台与とはいかなる人物になるのであろうか。卑弥呼には子が無かったようなので、血縁者ではないようである。考えられるのは鬼道の縁者である。そもそも、女王卑弥呼が一人で30ヶ国を超える国々を鬼道で治めることができるはずがないのである。そこで、国々には宗女が配されていたはずなのである。宗女たちは卑弥呼を頭領として各国を治めていたのだらう。台与はそんな中の有力な宗女の一人と認識されるのではないだろうか。だから、国中が定まったと考えられるのである。

また、上記の「魏志倭人伝」において重要な点は張政が台与を告諭したと記述されていることである。これは卑弥呼が狗奴国に苦戦していた時の状況と同様の記述である。このことは、卑弥呼が齋宮であったことと同様の位置に台与も立っていたことを意味するのであろう。そうは言っても、十三歳の少女が政治を司ることができるはずがなく、やはり男王がいてこれを鬼道によって台与が支えていたと考えるべきではなかろうか。

では、台与はどここの国の齋宮であったのか。少なくとも、男王を最初に立てて争乱を招いた邪馬台国ではないだろう。次に有力なのは投馬国となるのだが、この国は辰砂の産出以外に特筆することがない。となると、北九州の伊都国か奴国あたりが有力となってくる。ひとまずは、この両国が有力であると確認しておいて次に進んでいきたい。

第十四代仲哀天皇の皇后が著名な神功皇后である。何故この二人を急に取り上げたかという疑問に先ず答えなくてはならない。それは、神宮皇后が齋宮であり、また、台与であることをこれから証明しようとしているからである。

「日本書紀」の記述。第十三代成務天皇48年、立太子。仲哀天皇元年1月、即位。仲哀天皇2年1月、気長足姫尊を立后（神功皇后）。同6月穴門の豊浦津へ。仲哀8年1月、筑紫檀日宮へ。同9月、神功皇后が神がかり、渡海遠征するよう託宣するも、従わず、熊襲と戦い敗北する。仲哀天皇9年2月、崩御。

上記は仲哀天皇即位から崩御までの略記であるが、殆どが熊襲征伐に費やされている。天皇自ら熊襲征伐に皇后も帯同して大和（奈良）から九州へ赴くというようなことが史実であろうか。しかも、神がかりした皇后の託宣に従わず敗北しているという、恐ろしい記述となっているのである。これらのことからどうも仲哀天皇の実在性は疑ってかかった方がよさそうである。

崇神天皇が四道將軍を派遣したとか、景行天皇がヤマトタケルを東国に派遣したとか、成務天皇が国造や県主を定めたとかいう記紀の記述も、仲哀天皇自ら九州の熊襲征伐に赴かねばならないとなると、大和朝の威信がどのくらい全国に及んでいたのかは相当疑問であると考えざるを得ないのである。

これらのことを合理的に理解するには、大和朝と九州朝が併立しており、記紀の記述は時に大和朝を記述し、時に九州朝を記述し、併せて皇統譜として纏めてみせたというように考えることで説得力が出てくるのではないだろうか。具体的には、景行天皇を卑弥呼の死後の日向朝の男王と考えることである。

景行天皇9年、熊襲が朝廷に背いたので天皇自ら筑紫に出征し7年にわたって九州征伐を敢行するのである。そのようなことが現実に行われるとは考えられない。これは、日向朝が熊襲征伐を行ったことを記述している。「日本書紀」では、日向に行宮を造営していたと記述されており、このことが日向朝であることを語っているのではないだろうか。景行天皇の九州征伐の8年後熊襲が再び背いたと記述されている。「魏志倭人伝」では“男王立しも國中服せず”と記述された。

仲哀天皇9年2月、天皇が亡くなって後、神功皇后は神の崇りを恐れ、群臣に命じて罪を祓い、過ちを悔い改めるため、小山田邑（福岡県久山町）に齋宮を造らせた。皇后は自ら齋宮に入り神主となって、さらに信託を聞こうと努めたのだという。

齋宮制は天武天皇時に定められたというから、神功皇后の時代に齋宮という記述が適切であるのかという疑問は残るのであるが、齋宮的なことを行ったと理解すればいいのだろう。それよりも大事なことは、天武天皇が定めた齋宮とは少し趣が異なることに留意したい。即ち、神功皇后的齋宮は、卑弥呼と同様、琉球の「をなり神」に近いことである。

となると、男王がいなくてはならないのだが、既にお気づきのように、神功皇后には寄り添うように武内宿祢がいたのである。武内宿祢は景行天皇の「棟梁の臣」、成務天皇の「大臣」、仲哀天皇逝去時には豊浦宮で殯を行う、神功皇后が齋宮に入り仲哀天皇

に崇った神の名を知ろうとした時琴を弾く、応神天皇を連れて行った角鹿の神からホンダワケという名をもらう、仁徳天皇が見初めた日向のカミナガヒメとの結婚を策すなど、5代300年にわたって忠臣として活躍する。

さて、上記では神功皇后が武内宿禰の斎宮であったように記述したのだが、天皇の忠臣の武内宿禰の斎宮ということが成り立つのだろうか。やはり、斎宮は男王のために居なくてはならないと考えるべきであろう。となると、武内宿禰が男王でなくてはならないのだが、どうであったのだろうか。

記紀の記述では、武内宿禰は忠臣として記述されるのであるが、朝廷組織が固まっていないような時代に、倭国大乱の後の混乱の時代に5代にわたる忠臣という記述に真実味が感じられない。寧ろ、何かを隠すため真逆の表現をしたのではないかと思われるのである。即ち、記紀の隠した事実とは武内宿禰が男王だったということではないだろうか。身重の神功皇后が新羅遠征を敢行することなどできるはずがないのであり、(新羅遠征が事実とすれば)それは武内宿禰の業績に他ならないだろう。

「古事記」の記述。“仲哀天皇は筑紫の香椎宮に入り、神<sup>かみよ</sup>帰せのため琴を弾いた。神を呼んで熊襲征伐の神意をうかがうためだ。天皇が琴を弾きだすと神功皇后が突然神がかりになり巫女のように神のお告げをした”(この後、仲哀天皇が琴を弾くのを止めると天皇は暫くして亡くなっていた)。「日本書紀」仲哀天皇9年3月紀。”神功皇后は斎宮に入り、自ら神主になって仲哀天皇に崇った神の名を知ろうとした。その際に武内宿禰は琴を弾くことを命じられた“。大臣とはいえ、臣下がこのような場面で琴を弾くであろうか。また、仲哀天皇の殯も豊浦宮で武内宿禰が行っているのである。これらのことは、武内宿禰が男王であったと言わんばかりに思われるのだが、いかがであろうか。

因みに、「古事記」に記述されるオオナムチがスサノオの根の堅州国から逃げる段に王の重要な備品のことが描かれている。”オオナムチはスサノオの髪を大広間の屋根板を支えている垂木に結わえ付けた。それから大きな岩で戸口をふさいだ。「さあ、一緒に逃げよう！」とスセリヒメを背負う。この時オオナムチは、スサノオの大刀に弓矢、それに琴を持ち出すことを忘れなかった。この大刀(生大刀)と弓矢(生弓矢)は政治の支配権を示すものであり、琴(天詔琴)は、神<sup>かみよ</sup>帰せや信託を受ける際に必要なものであった“。

このように記述してくると、武内宿禰を男王にしたくなかったのは何故かという大きな疑問が生じてくるのである。それは、武内宿禰の出自に関係しているのではないかと考えられる。

実は武内宿禰には腹違いの弟がおり、甘美(うまし)内宿禰という。このことから、武・内宿禰は「勇猛な、内廷の宿禰」の意とされるのだが、一部研究者によれば「内」は内氏を意味するとの見解がある。そして内氏は九州地区に広く氏族の痕跡を残すのだ

という。また、「内」を冠した地名は大隅・薩摩半島に集中していることから、この一帯が熊襲族=武・内宿禰のルーツの地であろうとされている。

既に論述しているように、卑弥呼はニニギの後裔と推論した。ニニギの後裔ということは山幸彦の後裔とも言えるのである。「古事記」の記述では兄の海幸彦は弟の山幸彦との確執の後山幸彦の配下となる。そして、海幸彦の子孫の隼人は宮廷に仕えると記述される。この「古事記」の記述と内氏のルーツを繋げて考えると、海幸彦の後裔こそ武・内宿禰ということにならないだろうか。だから、皇室の忠臣として描かれる。男王などもってのほかということになるのであろう。

629年に成立した「梁書」には、晋の泰始2年（266年）に卑弥呼の宗女台与が王になり、その後男王が立ち、中国の爵位を並び受けたとある。

了